

ママ、死にたいなら死んでもいいよ

プロローグ

「死にたいなら、死んでもいいよ」

ざわざわと騒がしい神戸のカフェ。

正面に座る娘が放った一言に、私は言葉を失いました。

二〇〇八年、初夏のことでした。

その日、私は絶望の淵にいました。

急性の大動脈解離という心臓の病気によって胸から下が麻痺し、数ヶ月に渡って入院を続けていたのです。

歩くことはもちろん、当時は寝返りを打つことも、ベッドから起き上がることもできませんでした。

来る日も来る日も、天井を見つめながら涙を流しました。

入院一八〇日目にしてようやく外出許可があり、私は喜びに心を踊らせていたのです。

しかし、待っていたのは厳しい現実でした。

自分の足で歩いていた頃は、神戸三宮駅を降り、改札から街へと出るまで一分もかかりませんでした。

でもそこには、車いすで越えられない階段があったのです。

お手洗いに行きたくても、車いすで入れる個室はなかなか見つかりません。

十七歳の娘に車いすを押ししてもらい、散々迷ってたどり着いたお店の中は狭く、席に着くことすらできませんでした。

どれもこれも、歩いていた頃には気にも留めなかったことばかりです。

「すみません、ごめんなさい、通らせてください」

気がつけば私は一日中、謝ってばかりいました。

やっと入れるレストランを見つけた時、私は疲れ切っていました。

車いすでの外出が、こんなに苦しいとは思わなかったのです。

「なんで私は生きてるんだらう。死んだ方がマシだった……」

思わず、口にしてしまいました。

終わらない入院生活、つらいリハビリ、楽しめない外出。

世界中の誰からも必要とされていないような気分。

限界だったのだと思います。

すぐに「しまった、なんてことを言ってしまったんだらう」と後悔しました。

私は娘の顔を見ることができませんでした。

私はてっきり、「死なないで」「なんでそんなこと言うの」と娘は泣いて言うだろうと思っていました。

娘は私の一番の理解者です。

病気で倒れる前もしょっちゅう二人でショッピングや映画に出かけていましたし、親子でありながら友達のように仲が良かったのです。

そんな娘から返ってきたのは思いもがけず、肯定の言葉でした。

「死にたいなら、死んでもいいよ」

皆さんの中には、ビックリしてしまう人もいるでしょう。

親に向かってひどい娘だ、と怒る人もいるかもしれませんが。

しかし娘の言葉は、それまで受け取ってきたどんな言葉よりも、私を救いました。自分の足で歩けず絶望していた私は、再び前に進むうと決めました。

「死んでもいいよ」から、私の新しい人生が始まったのです。

内容紹介

知的障害のある長男の出産、夫の突然死、生存率二割の大手術から生還するも、下半身麻痺となり、車椅子生活に。

幾多の試練が容赦なく襲いかかり、もはや命を絶つしかないと思ったその矢先、著者は「死にたいなら死んでもいいよ」という娘の一言に救われ、前へ踏み出す勇気を得たといえます。

本書は現在年間一八〇回以上もの講演を行い、人々に生きる勇気を与えている著者による初の自叙伝です。

なぜ、彼女はかくも強いのか？

なぜ、かくも明るく生きられるのか？

特筆すべきは、折に触れ著者を前に進ませようとする娘の存在。心の持ちようで人間の運命は決まると、読者に対しても深い示唆を与えてくれます。

巻末に添えられた「娘から母への手紙」で、書名に秘められた真意が明らかになるとともに、深い感動が全身を貫いていくことでしょう。

人間学の致知出版社が贈る感動のヒューマンストーリー。泣ける感動実話です。

TEDx 講演動画をはじめ、SNSで五万シェア。朝日新聞「ひと」、テレビ「NEWS ZERO」ほか、メディア出演多数の著者による初めての著書。

続きはぜひ、書籍でお読みください。